

アトモスフィア

浦島太郎が描く研究者として歩む大学の道

植野 洋志*

私は浦島太郎状態であった。大学院からの在米生活を切上げて帰国したのは1990年初頭で、この間、バブルなど全く知らなかった。それから、大学改革を経験し、あっという間に定年である。今回このような機会を与えていただいたので、生化学分野の将来のためのシードとして少し書き留めておきたい。

大学の法人化が叫ばれるはるか以前にある教授から「日本の大学をよくするにはどうしたらよいですかね」と廊下で対話が始まり、「国立大学教員は公務員をやめるんですね」と答えたら、即座に「それは大胆なご発言で」と一蹴されて対話が終わったことがある。私はニューヨークのとある有名？大学に在職していたが、そこでは研究職には週何時間という事務系に課せられる労働条件がなく「1年間あなたを雇います」式の契約をしていたので、それを思い描いての発言であった。しかし理解してもらっていなかったようだ。その大学では成果主義というのだろうか、働く時間よりも結果が大切だという制度が定着していたのだろうか。少なくともオリジナルな研究成果を狙うことを建前とする研究者が大学教員を兼ねるのなら、時間の束縛なく自分の時間を自由に配分することで新しい発想が生まれるということにこだわりをもって欲しい。その後、国立大学法人化が実現して私の言ったように脱公務員化が実現したのだが、残念ながら雇用形態はそのまま、いまだに出勤簿にハンコを押している。ノーベル賞を狙うような大学人を育てたいならば、雇用体制の改革で「厳しいけれど結果をだせる」環境整備を実現できるところができてよいと思う。

私は発想こそが学者の命だと考える。同じ現象を眺めても、ヒトによっては観方が異なる。そこから問題点を見出し、解決につなげる手法を選択し、得られる結果を解析し、問題の解明につなげ、現象をより深く理解するという流れが研究の根底にあると思う。大学の、特に大学院での、人材育成の根幹をなすべき教育課題はここにあるのではないだろうか。肝心の教員の予定表が分刻みで超多忙であるなら、いったいいつ研究のアイデアが浮かび、学生とともにそれにチャレンジできるのだろうか？論文を読む暇もないならば、まさか、部下任せ。まさか、他人のアイデアを仕込んできたりする物まね主義ではないとは思いますが、研究に対する姿勢の違いは欧米とは異なっている。多分、事務レベルで済むような会議に時間を取られすぎなのであるが、もっと「勉強」しないとオリジナルな研究成果からは遠ざかるのではないか（最も、あと数年で定年ともなると、誰も長期展望しなくなるものであるが）。ぜひ、問題解決には多くの窓口（研究手法）があり、たえずいろいろな角度から問題にチャレンジできることを身をもって学生たちに示し、ともに学問の進歩に貢献する姿勢が欲しい。それであれば、学生も育つと思う。だが、それができないのが現実なので、困ったものである。

予算のことに触れたい。90年初頭はバブル後ではあるが、簡単な予算請求で大型設備費が配備された時代でもあった。しかし、あっという間に年間予算が50~100万円規模になり、大型設備費はほぼゼロになっている。学生時代には講座あたり5~6百万あった研究費であるが、どうして物価の上昇についていけないのだろうか？40年間の物価の変動を考慮しても、研究室あたり1千万円規模の予算を備えないと生化学的研究は世界と戦えない時代であるのに。小規模大学では、学内で大型機器・共通機器を配備してくれている訳ではないので、すべて研究室で備えないといけないし、ましてや大講座制の下では研究室あたりの外部資金獲得額が限定されている。これらの問題はアトモスフィアでも多く触れられてきたが、研究費の低さが資金獲得の問題と直結し、その根底には論文（数や質）や外部資金への評価制度がある。学問の発展を目指すはずの学術論文が世界的にインパクトファクターでの点取り合戦になってしまっている。いろんなところで行われている審査への公平さの再確認が必要である。真の学問への貢献度を知る（評価する）には時を経ないといけないので「米百俵の精神」を忘れずに生化学の研究を育てていきたいものである。最後に、適切な予算配分は研究者（教師）のやる気にもつながる。教師がやる気をなくすと、その気概は学生にも感染することを肝に銘じたいものである。

私の浦島太郎状態であるが、母校を訪ねて驚いたことは、学生時代の恩師の先生方がほぼ在職しておられたことであった。こちらでは、昔と変わらぬ世界があったことは喜びでもあり、驚きでもあった。

*奈良女子大学・近畿支部長